

第二期 第一〇八号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 07. 10 定有堂書店 発行

定有堂教室「読む会」

乗り鉄が国土の不均衡な発展を考える

まっすぐ日記

気がついたら

この旅は再現できません (Error 501)

臨場感

日々は雑言 (ぞうじん) 6

People Everyday

本を作る側から (28)

内坪井町日記 (14)

論語について (2)

抽象に逃げない

紫陽花と青楓

鳥取、さらば。

梅の実

案内

奈良 敏行

岩田 直樹

鳥居 貴彦

白井 明大

板野 円香

おぎはらきえ

萩原 俊郎

高木 善祥

村瀬 謙介

齊藤 仁昭

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

三浦 永理

あきの素生

ドラマメリア

定有堂教室「読む会」

奈良 敏行

(定有堂 主人)

夏に鳥取県の図書館大会があり、その分科会で、「読書」について考えてみないかという話があった(二〇二五)。基調講演が、『「若者の読書離れ」というウソ』という著書のある飯田一史さんなので、わたしたちの分科会は自ずと「大人の読書」ということになる。

定有堂の読書会「読む会」は一九八八年になんとなく始まった。とくに下図があったわけではない。本が好きで、本を勧めることが好きな濱崎洋三先生という高校教師とわたしが出会い、本屋の「定有堂教室」という場で始めたものだ。

一九八〇年代後半は、定有堂の周辺では新しい本、新しい著者を発見するということに情熱を傾ける人が多かった。才能の湧き出る時代だったのだ。読書の荒野を切り拓く熱狂がそこかしこにあった。会の名称も任意なもので、本を読むために集まるだけだから、気負いもなく、「読む会」と名付けられた。

この「読む会」を後に、わたしは焚き火のような集りだ

と語ることになる。本を読み合うという温もりを求めて人が集まる。焚き火みたいだという見立てだった。焚き火は一人でも始められる。本を読み、読んだ本を人に勧め、その読書という炎の熱量を放出し続ける濱崎先生は、すでに一個の焚き火だった。しかし炎を絶やさず続けるためには、焚き付けの木切れや周囲を取り囲む木材が必要だ。濱崎先生の読書への情熱は、太薪（ふとまき）として長く燃え続ける焚き火の中心を支える本体となった。

それから三十七年たった。濱崎先生は八年目に亡くなったが、その警咳に接した人は、岩田直樹先生をはじめ現在四人残っている。太薪を取り囲み、炎を絶やさなかった、中薪（なかまき）の四人衆だ。追い焚きの細枝を持って訪れた人は数十人にのぼる。

定有堂の「読む会」の特色は、太薪がしっかり支えの中心にあり、それを中薪の人たちが取り囲み続け、追い焚きの細枝を持参して出入りした人たちが続いたということだ。身体性としての太薪は八年目に亡くなったが、焚き火はそれからも二十九年続いている。通算すれば三十七年もの長きにわたる読書会なのだ。

濱崎先生の死後一年かけて遺稿集が編まれた。「読む会」そして歴史家としての先生に師事した人たちに寄って編纂された。刊行元は定有堂書店。『伝えたいこと』という書

名だった。「大きな声を信用するな、本を読み、自分の頭で考えろ」、そういうメッセージもあった。この本が身体性としてその後も太薪であり続けた。

「読書が大事」ということは人を説得するようなテーマではない。「読書が大事」と思う人がいると告げる、それだけで事は終わる。

「本を読む人」に出会って「本のたのしき」が広がる。しかしそのためにはすでに本を読んでいなければならぬ。読書にはそのような相剋がある。

本が好き、なぜ本が好きなのかその始原は定かでない。振り返る必要はないのだと思う。読書の楽しみは、その営みの外部に出ることではない。読書の内部にひたり続けることで十分なのである。

「読む会」の特色はいつの間にか、「本を読んで来なくてもよい読書会」と説明されるようになった。説明というより案内だろうか。社会人にとって毎月一冊をていねいに読み込むのは大変だ。読み切れなかった、というので出席をためらうようではあまりに残念だ。それに深掘りして読んで参加した人はあんがい失望することになる。多くがそういう読み方はしないからだ。

「読んで来なくてもいい」というのはどういう事だろう。

ここは「本の解釈」をする場ではないということだ。「この本は何を言いたいのか」と正しく読解・解釈をする場ではないということだ。「読む会」は正解を発見して毎回を終えるのではない。同床異夢なのかもしれないが、何となく自分なりの腑に落ちるところがあったと満足して帰る集りなのだ。会の始めの緊張が揺らぎ、最後に場が温まる。

「読書」に「主題」を求めるのではなく「きっかけ」を求める、と「読む会」の営みをまとめてもいいのかもしれない。主題を求め合うとその先に「正解」が現れるが、個々の身体性を納得させるものではない。読書会は多数決の場ではないのだ。読書は「きっかけ」なのだと考えを転換させれば、一冊の本は自分の思考を活性化させる触媒となる。

わたしは読書をするときには、気に入った箇所に傍線を引く。いままでは知らなかったが、この言葉に出合って、少し違った概念世界で物事を考えられると思ったら、その言葉を丸で囲む。これだけで、この一冊の本はわたしの本になる。ときに熱心に傍線を引いて読んでいる仲間にも出会う。でもけっこう違う箇所に線が引いてあって面白く思う。

長く本を読み続けてきた人は、本を正しく理解し共通の正解を人と照合し合うことはもういいと考える。同じ本を

読んでまったく別の結論に到達したとしたら、その方がもっと楽しい。その路筋の方がじつは読書の醍醐味なのだ。

若い日の読書は指導してくれる人もいて、本を読めば何らかの答えに到達するものだ。逆に言えば到達する場所のある本を勧められてきた。大人になってからの読書は読めば読むほど問いが増えるものだった。問いが増殖する。なかには才能がある人もいて、「書かれていないものを作り出そう」とする人も周囲に増えていく。

読書は、読み終えて終着点にたどり着くのではなく、読み終えたそこに出発点がある。読書は荒野を耕作地に変えるものでなく、耕作地の外部へ、荒野へといざなうものだ。「読む会」を三十九年続けて、多くの人たちと読書の時間を共にし、いつかそのように考えるようになった。読書に結論はいらない、と。

2025.06.09

飯田一史 『「若者の読書離れ」というウソ 中高生はどのく

らい、どんな本を読んでいるのか』 平凡社新書 2023

濱崎洋三 『伝えたいこと』 定有堂書店 1998

奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日刊行



乗り鉄が国土の不均衡な発展を考える。

岩田 直樹

（再解釈本舗・「読む会」講師）

一ヶ月ほど前、ある懇親会で久しぶりに会った年上の知人から「仕事を辞めたのか」と尋ねられた。唐突な質問だったのでポカンとしていたら、「定有堂ホームページに載っている、何と言ったっけ、小冊子の肩書がよくわからないものになっていたから」とのこと。

そうか、きちんと『音信不通』を読んでくれているのか。ありがたいことだ。お互いに酒が入っている。「再解釈本舗」とは何なのか、細かい話をするのも面倒だ。「同じ職場に勤めています。所属部署が変わって長い職名になり一行に収まらなくて」とお茶を濁す。

カタカナで二三文字もある（長過ぎるのでここでは省略）。今年度からの新設部署らしく、年度末に「どんな職名がいい？」と聞かれた。何も考えずについて「カッコいいはどうですか」と答えて、実際にそれらしい名称になった。「部署も職名も変わったのだから仕事内容も変わったのだろう」と知人。「いや、それが何も変わっていないんです」と私。

私にとって毎年六月は超繁忙期である。地元の二大学が合同で、高校教員対象の進学説明会を全国二九ヶ所（東京以西の主に新幹線沿線）＋県内三ヶ所で開催している。この仕事は四年目になる。今まで東京から熊本まで一九都市（複数回、県内は除く）を訪れた。出張であり、もちろん物見遊山はできない。ただし午後開催のため、午前中と夕方以降は移動がてら乗り鉄ができる。印象に残った路線を二つ挙げてみる。

まずは、東海道本線普通列車の旅。

乗り鉄には厳しい掟がある。新幹線と並行在来線が走っている場合、その二つは別路線と考えるのである。東京から新大阪へ行く場合、東海道新幹線と東海道本線のいずれを使うかは大問題なのだ。

夜間の東海道本線は、ブルートレイン「出雲」（鳥取・東京間は一日二往復あった）や「サンライズ出雲」で乗り通したことは両手の指で数えきれないほどある。しかし、明るい時間帯を乗り通したことはない。午前中に東京を出て、午後には東海道本線終点の神戸到着は余裕で可能だが（例えば、東京五時二〇分発、神戸一四時四〇分着）、それでは仕事にならない。細切れで挑戦するしかない。

進学説明会の会場が品川、静岡、名古屋、京都の並びになったことがある。「これはチャンス！」と思いつつ。東京―品川―小田原(泊)―国府津―御殿場―沼津―静岡―浜松―豊橋―岡崎(泊)―大府―武豊―金山―多治見―岐阜―名古屋―大垣―美濃赤坂―大垣―米原(泊)―草津―柘植―加茂―木津―京都―姫路―上郡―鳥取。特急に乗ったのは上郡―鳥取のみ。最も忘れたいのは名松線である。何県の路線か即座に答えられる人は、間違いなく乗り鉄である。三重県名張と松阪を結ぶ路線として計画されたが、全線開通せずに伊勢奥津までの盲腸線となっている。

私が乗ったのは夕方であった。松阪から西北西方向に一五キロほど近鉄大阪線と平行して走る。松阪始発の二両編成気動車には約三〇人が乗車、半分以上は高校生だ。終点まで約一時間半の小さな旅である。

名松線は、伊勢本街道(奈良―名張―松阪―伊勢神宮)の一部を辿っており、かつては栄えたのだろう。家城から雲出川に沿って上流方向へ向かう。幅五〇〇メートルほどの谷あいを見下ろす。ディーゼルエンジン全開で上っていく。時速一五キロの箇所もある。リゾートホテルの廃墟や現役の材木工場もある。終点の伊勢奥津は伊勢本街道の宿場町、約三キロで奈良県境である。バス

旅の番組だと、県境の峠を歩いて越え奈良県側のコミニティバスに乗ることができそうだ。

伊勢奥津一八時五八分発の上り最終列車には、終点まで私以外に乗降客はなかった。二〇〇九年から七年間、台風被害の復旧工事期間はバス代替輸送だった。不採算路線を再開させたのはどんな事情だったのか。

私は、ガタンゴトンと揺られながらローカル線の車窓を眺めるのも、飛行機の離陸速度に匹敵する時速三〇〇キロで疾走する新幹線に乗るのも大好きである。おかげさまで(誰のおかげ?)、JR乗りつぶし率は九八パーセントを超えてきた。

しかし最近では、能天気に乗っているだけでは済まなくなつた。新幹線沿線とそれ以外の地域でインフラ整備状況の格差がかなりのスピードで広がってきている。中核都市の駅前にはタワー・マンションをはじめ高いビルがそびえ立つ。それなのに三〇分も乗ると、同じ県とは思えないような光景が広がる。

国土の均衡ある持続的発展の可能性とは? 地方創生とは? そんなことを考えながら、乗っているのである。

まつすぐ日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

朝八時、小学校の前のまつすぐな道をたくさん的小学生たちがうねうねと歩いてくる。背中に「ヨ」やかかれた黄色いベストを着て道端に立つ。挨拶したり、恥ずかしそうに目を逸らされたり、肩にパンチをしたりする。数ヶ月前、気がついたら「ヨ」の役員になっていた。店でぼーっとしていたら「副会長」という役が向こうからやってきたのだ。なにをしたらいいかわからないが、知らない子どもたちの入学式に出たり、眠そうにうねうね歩く小学生たちを眺めたりしている。

もともと近所にあった八百屋のような飲み屋のような店が、さらに近所に引越してくるという。直線という大きな声を出せばもしかしたら聞こえるくらいの距離。でもあいだに家がいっぱい建っているのでまつすぐには行けな

い。くるつとまわってふたすじ向こう。古い古民家を直して店にするというので、何度か工事を見に行った。梁は傾いていて、土壁も歪んでいるように見える。歪んでいるが崩れることはない。妙な安心感があるゆらゆらとしなやかな家。そこにまつすぐな木材をはめていく大工。眺めているだけではアレなので高いところを拭いたり本棚に本を並べてみたりする。二ヶ月くらいたって、うす暗い空き家が風の通る店になっていた。

長く続けさせてもらっていた新聞のコーナーが、次回で終わると連絡があった。三〇〇字程度のちいさな連載。三〇〇字で本を紹介するのはむずかしい。余計なことをダラダラ書いてはすぐに文字数が足りなくなる。いつも字数をオーバーして編集のひとにあちこち切ってもらっていた。残るのは本当に必要なことだけをぼんとおいたような文章。最後の本は『ぼくはあるいたまつすぐまつすぐ』にした。ほとんどの絵本は見えて、触って、ページをめくったらだいたいのはわかる。なにを書いたらいいかわくわからないので原稿にかかる前に息子に読んでみた。「えー」とか「なんで」とか言いながら聞いている。なにを考えているのかは聞かなかった。おとなの解釈が物語を曲げてしまうこともある。結局いろいろ書いて原稿を送ってから、

わざわざ言葉であれこれ紹介するほどつまらないことはない、などと考えている。やっぱり三〇〇字くらいがちょうどいいのかもしれない。

五年生になったじゆんが学校の帰りに店に入ってきた。

家に誰もいないという。「ここでジュースとかコーヒーと
か出してさ、飲んでもらったら人がいっぱいくるようにな
るんちゃう」という。アメリカの本屋ってどんなんやっ
たと聞いてみる。「ベンチがあつて、好きに本が読めた」「で
もみんなちゃんと本買ってたな」

じゆんが帰ってから、外のベンチに独り腰かけてみる。

少し足りないくらいがいいのかもしれないな、と思った。

お店に行くということはお金を使うということだ。高速道
路のパーキングエリアに寄るとなぜかソフトクリームを食
べたくなるのはそういうことだろう。本屋にいて、座つ
て読むだけだとちよつと足りない。でもコーヒーが飲め
ちやつたらもう満足。肩たたきとかしてくれる本屋ができ
たら誰も本を買わなくなると思う。かといって本とレジだ
けでは足りなさすぎる。駅の売店が街中にあつても流行ら
ない。みんなそんなに急いでいない。ぽんとベンチがある
アメリカの本屋は本を買いたいひとにちょうどいいのでは
ないか。日本の本屋はどうだろう。本以外のものを売りす

ぎていないか。本じゃないところで満足させようとしてい
ないか。儲かつていればなんでもいいのかもしれないが。
京都の片隅の本屋は、人がいっぱいくるようになるとう
れしいかと聞かれるとちよつと微妙な気持ちではある。

開風社

〒602-8125 京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町8

18

080-3166-1385

info@kaifusha-books.com

<http://www.kaifusha-books.com>

気が付いたら

白井明大

(詩人)

七月九日から若桜橋の南岸の袂にあるベークル喫茶森の生活者にて『ヘリヤ記Ⅱ』展を予定していて、いまは物語からこぼれた小さな粒のような番外篇のショートストリーを書いていく。

展覧会がはじまる前にどうにか三篇作るつもりで、その三篇をそれぞれ会場と、吉方町の邯鄲堂、定有堂ビル二階のSHEEPSHEEP BOOKSに置いてもらい、『ヘリヤ記』をお持ちの人が店を訪れたときにさきやかながらのプレゼントにできたらと思っているのだけれど、そんなふうになんと期日に間に合うか、だれかそんな読み手が実際に店を訪れてくれるかどうかは皆目わからず、とにかく思いついたアイデアを形にすることだけ考えて、いまは手を動かしている。

わからないことは楽しい。いくつもの未知や不思議、疑問、理解を超えた何かなどなどが頭のなかに満ちていると、まったく展望がひらけず、どうしていいか立ち止まったま

ま途方に暮れてぼんやりするしかなくなるのが心地いい。そんなふうに半年でも一年でも二年でも時間を棒に振って過(こ)してきた来し方をふりかえるときすがに堪えることもあって、その場そのときの楽しさと、あとからふと兆す不安や迷いとが矛盾してしまうのは自分なりに整理する必要があるかもしれない、たとえば鳥取に住みはじめて五年目になるのだけれど、楽しく過(こ)してきたなあとはいつつ、越してきたばかりの頃とはいろいろなことが変わっている現状にある日はたとえ気づくと、何か取り返しのない見落としをしてしまったのではないかと悔いめいた感情が湧いてくやうとする。

四年数か月分の時間は流れていて、ぼくがぼんやり過(こ)してきた間にも世間は動いているんだと当たり前のことが気持ちの上で飲み込めないとしたら整理する以外ない。五月の次には六月が来て、六月が終われば七月になる。展覧会まであといくらかもないと目の前のことに意識を移せばまた楽しくいまを過(こ)すことができそう、たぶんこういうふうには日々を送れないんだろう。

それでも鳥取で新しい詩集、憲法の詩訳本、その詩訳をもとにした絵本、そしていつか書きたいと思ってきたファンタジーの物語を二冊上梓できたことは、ぼくの手許にあって確かめることができるよろこびにはかならない。いずれ

の本も、鳥取という地のおかげで書き得たものだと感じていて、野鳥や春の山野の光景、神話や万葉の時代からつづく時の積み重なり、政治がもたらした地域格差のありありとした現実、袋川や樽谿など心惹かれる場所……鳥取で暮らすきなかに身のうちに降り積もるものが言葉になっていくのは、生きることと書くことが不可分だからで、それはどこで暮らそうとそうであり、だとしたならここで暮らすことで生まれた言葉に違いなく、いますでに一本の道になっている。

詩はいまを、季節の本では過去を主題としてきて、その意味でいうと空想の世界の物語、ファンタジーというのは未来を取り扱うものにも思えてならず、時計の先へと目を向けようとしたとき、この地からの視野ということになり、やはり言葉の足場に地というものが結びついていることを感じつつ、言葉を書くことのできるよろこびに没入してしまう。

番外篇の三篇も、できればその場所となにかしらの関わり、接点などあればと思っていて、ヘリヤの世界の小さなかけらを、たとえば森の生活者なら接点になるものは何だろうかと空想しつつ、その接点に絡めてだれかの姿を書けないものかとメモしてみたり、邯鄲堂の、普段とは異なる時が流れていそうなあのふしぎな空間にびったりな話ほど

んなだろうかと思索したり、建物自体に物語が満ちあふれている定有堂ビルの雰囲気にそぐう話を何か書けたらと思いつめぐらせたり、六月は頭の中が忙しくてあつというまに月末まで来ているのもなんだか心地よく熱に浮かされていくように。

十三日には映画監督の佐々木友輔さんを、最終日の二十七日には奈良敏行さんと伊民公恵さんをゲストにお迎えしてギャラリートークをひらけることとなり、つくづくありがたくも幸せなことだとはじまる前から一人感じ入ってしまっているうちに、また気がついたら当日が来ているのかもしれない。

(参考・編集部)

- 白井明大 『ヘリヤ記 Ⅱ《結び手》』 詩之友社 2025
- 白井明大 『日本の憲法 最初の話』 KADOKAWA 2023
- 白井明大 『着雪する小葉となつて』 思潮社 2021
- 白井明大 『一日の言葉、一生の言葉 旧暦でめぐる美しい日本語』 草思社 2018
- 白井明大 『生きようと生きるほうへ』 思潮社 2015

①の旅は再現できません (Error 501)

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

ここ一カ月、映画も観ず、鼻屑にしている本屋にも行かず、ただ仕事場と自宅を往復するだけの毎日が続いている。この四月から受け持つ業務が増えたのだが、現場で働く身にとってそれ専用の時間を設ける事は難しいため、①データ解析や学会発表資料の作成、②講習会のスライド作成(月2〜4枠くらい)、③疾病予防に向けた書籍の執筆、といったような事項は、必然的にプライベート時間を削つての対応となる。

特に②に関しては、作成に膨大な時間を取られるため、「何とか効率化出来ないか」と思い、『スライド生成AI』を試してみたものの、出来上がった資料はイマイチだった。結局メインで動いているプログラムのオブジェクト指向が異なるためであるのだが、私の目的を達成するには、思考の動的生成と表現の静的定着を分業する仕掛けが必要と思われた。講習会の素案は学習型AIに投げ、適切な内容と

なるよう人力で肉付けし、返す。その後、前後の文脈から情報の断層化を行い(並列で見せるのか、引用表記か等)、既定のスライドに自動マッピングするよう予め組んでいた静的型付け言語へデータを受け渡し、講習スライドが完成。こういう静的・動的バインディングの中間をとるようなサービスがあれば助かるのだが、もう面倒くせえので作っちゃおうかな、とも思っている。

前述のとおり、何処へも行かず、エッセイのネタとなるような特別な事は何も出来なかった私であるが、気付けは毎晩旅をしていた。それもイランにソマリア、コンゴ人民共和国といった僻境に。中でもコンゴに至っては、幻獣ムベンベを見つけに行ったのだ。

——「何を言ってるんだ」という声も聞こえて来そうだが、ピンと来た方もいるはずだろう。何れも、高野秀行さんというノンフィクション作家による書籍である。

私はよく気分転換に旅行記を読むのだが、取分け「土の臭い」がする「再現不可能」な記録などは最高である。

本棚を見渡せば、『パウル』という独自の宗教観を持った吟遊行者を探す旅「パウルを探して」や、バックパッカーのタミオー氏による旅の記録「タミオー日記」等が並び、後者においては、飛行機の搭乗券や店のオヤジによるメモ書き、ゴミから拾い出したパッケージなども組み込まれて

おり、その無法さ・騒々しさが独特の魅力を放つ。

そんな旅行記専用棚の中でも、高野秀行氏の著作が比較的多くを占め、書名も「アヘン王国潜入記」「イラク水滸伝」「謎の独立国家ソマリランド」「幻獣ムベンベを追え」といった具合なので、彼を知らない人が見たら私の人格まで疑われてしまいそうですらある。

高野氏を知るきっかけになったのが、TBSの「クレイジージャーニー」という番組で、その時はアヘン王国と呼ばれる麻薬密造地帯の潜入報告だった。高野氏のモットーは「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」であり、著作の中でも、現地生活に溶け込み、危ない橋もわたり、何でも口に放り込むという一貫したスタイルは守られているので安心してほしい(?)。しかし、こゝも高野氏の作品にハマる理由は何だろうか。知らない風景や文化を見知る、地層化した歴史を学ぶのであれば、他のライターでも良いはずだ。其れこそネット検索でも必要な情報にアクセス出来る。

その理由の一つに、ルポと小説のあわいを行く、独特の文章であるように思う。「イラク水滸伝」では、現地に足を踏み込んで得られた生々しい観察に加え、その背景となる地理的变化についても丁寧に掘り下げられており、読者がイメージ易い作りとなっている(例…イラク水源省が作

成した湿地帯の形成過程マップ 1977と2010の比較)。現地取材に留まらず、引用や付録が添えられた構成は、学術論文を思わせるようでもある。かと思えば、お調子者のドライバーの話や、暗闇のなか水牛と見つめ合うシーン、灼熱の砂漠を吹き荒れる風に「SF小説に出てくる『時空がねじれて起きる磁気嵐』のようだ」と、数千年前の姿に想いを馳せたりなどと、一見ルポには不要な記述も点在する。「幻獣ムベンベを追え」では、その名のとおり、ムベンベに会うことが旅の主要な目的であるのだが、物語が進むにつれて、ムベンベは単なる生物としての一個体から、土や風、或いは原住民の肉体に宿る神のような存在へと、その輪郭を緩やかに変容していく。その様子は民話、寓話的な印象をも受ける。このような表現に、高野氏独自の魅力があるように感じるのだ。手段以上に再現不可能だ。

ところで、技術の発達で交通手段はますます便利になりつつあり、「飛行機の代わりにロケットで大陸移動を」という計画もあるようだ。果たして「異邦」が「異邦として」認識されるのはいつまでだろう。そこそこ不便さを感じる今のうちに、見知らぬ土地を踏んでおきたいものだ。

臨場感

おぎはら きえ

(蔭山)

コッポラ監督最新作の公開記念『地獄の黙示録 ファイナル・カット』IMAX再上映が決定！

ネットニュースでこの見出しを読んだ時から、私の頭の中では『The Doors』の『The End』が流れ、炎に飲み込まれるヤシ林が見えるのだった。

映画『地獄の黙示録』は一九六〇年代末、戦争中のベトナムが舞台だ。特殊任務を受けた米軍のウィラード大尉が、兵士としてはほぼ素人で任務を知らされていない部下四人と共に哨戒艇で川を遡ってカンボジアの奥地に向かう。ウィラードが受けたその特殊任務とは、将来を囑望されたエリート軍人ながら脱走してカンボジアの奥地で現地人を従え、自らの王国を築いているカーツ大佐の暗殺である。

The Doors の『The End』が流れ、ヤシ林が炎に飲み込まれるというのはこの映画の冒頭のシーンである。炎が上がるのは米軍のナパーム弾投下によるものだ。私はこの映画をテレビ放映とレンタルで二回は見たことがある。ウィグナーの『ワルキューレ』を流しながら奇襲をかける米軍

のヘリコプター部隊、情け容赦ない爆弾と銃の嵐、人間が人間と自然を蹂躪する一方で、灼熱の太陽光線、人間の愚行をものともしないような壮大な熱帯雨林のジャングルの恐怖…。

映画館の大画面で見なければなるまい。二回見て展開は知っていたようにも。実はDVDも買って持っていたようにも。最も近隣で上映しているイオンシネマ岡山に車を走らせた。

六月の緑が好きだ。若々しい新緑が濃い緑に変わり、梅雨の曇天の下、不気味に蠢いている感じがいい。熱帯雨林のダイナミックさには敵わないけれど、智頭町の杉を眺め、中国山地を縦断し、吉野川を横目に岡山市内へ向かうドラマイブコースは気に入っている。

『地獄の黙示録』といえば原作のジョゼフ・コンラッド著『闇の奥』（岩波文庫）だ。一八九九年に発表されたこの小説の舞台はアフリカのコンゴ。やり手の象牙採取人クルツが消息を断つたため救出に向かった船乗りマローウの回想によって語られる。川を遡ってジャングルの奥地へ。その過程で目撃した奴隷黒人たちの扱われ方、原住民からの襲撃など、本国にいて搾取したものを享受しているだけの者には決してわからない植民地支配の惨状、自然の壮絶さなど興味深い。

しかしコッポラ監督はこの作品をベトナム戦争を舞台にして見事に翻案したものだ。なんてことを考えながら運転をしていた。

『地獄の黙示録』の上映時間は三時間と長めであるが、すでに展開を知っているからこそ細部を観察する余裕もあり結構楽しめた。殺戮が行われている戦争のさなか、カーツ大佐がベトナム人協力者を独断で殺害した「殺人罪」で起訴されているという皮肉と矛盾。平穩な故郷と血みどろの戦場との落差に混乱し、カーツに共感すら感じるウィラー大尉の精神の揺らぎ。

攻撃の標的地へ向かうヘリコプター十一機を正面から捉えたシーン、草や樹木が大きく生い茂った薄暗いジャングルのシーンなどから感じた恐怖は大型スクリーンの賜物だ。ウィラーを演じるマーティン・シーンがかっこよかった。ちよつとしか出てこなかったけど、ウィラーに任務を伝える軍人役のハリソン・フォードもかっこよかった。やっぱり映画館で見てよかったなあと満足して岡山を後にした。家に帰って靴の中を片付けた時、改めてレシートを見た。あれっ、映画の料金、高くないか？

上映開始時間ギリギリに到着し、焦りながら券売機でクレジットカードを使って支払ったので金額をちゃんと見てなかったけど、一般料金と、さらに「IMAX 六〇〇円」と

印字されている。何だ、IMAXって。

「驚異的なシャープネス。映像の細部まで信じられないほどシャープかつクリアに再現」「12chのリアルサウンド。針が床に落ちる小さな音から、お腹に響くような火山の噴火音まで、独自に設計された12chサウンドシステムがリアルに再現」とかなんとか、ネットで検索してみるとそう紹介してある。それらの要素で「かつてない臨場感が客席を包み、観る者を映画の中へと」導いてくれる特別な装置がついたシアターらしい。

へー、あれただスクリーンと音がでかいだけじゃなかったんだー。見返してみれば、最初に今回の上映を知ったネットニュースの見出しにもIMAXと書いてあった。まあ臨場感を感じたけど、全然わかってなかった。せつかくだから「やっぱりIMAXともなると違うねえ」とか思いたかったが、後の祭りだ。

そして『地獄の黙示録』の再上映は終わり、コッポラ監督最新作『メガロポリス』の上映が始まった。もちろんIMAXでだ。

(著作)

おぎはらきえ『迷妄象昧』 蔭山 2025

定有堂倉吉支店その六十七

日々是雑言（ぞうごん） 6

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

「波風大いに立てるべし」

もう30年近くも前、1997年の春先、私は岩手行きの新幹線に乗っていた。国の減反政策に異を唱えた東北の小さな町の町長に会いに行くためだった。

「農家は生産者保護の名目による減反助成金とひきかえに、働く意欲、あすの農業を考えることをやめ始めている。あるのは、あきらめと惰性だ」と『自主減反』を唱えた岩手県東和町（のちに花巻市と合併）の小原秀夫町長。

東和町はなにも、米をどんどん作らせろ、と主張したわけではない。「売りさばく自信があれば生産し、なければ減反。その判断はわれわれ産地の自主性にまかせるべき、そして結果は市場原理が下す」。そのために町は官庁や流通業界に情報網を広げ、居酒屋チェーンとの連携や、大都

市圏の消費者への産直販売体制を築いていた。

一方、国は「みんなが東和町に続けば需給バランスが崩れ、米価が急落、日本の農家はつぶれる」と町を攻撃、国の補助金カットを恐れた地元農協や保守系議員は浮き足立ち、やがて同町の計画は夢半ばに終わった。

「われら東北人は朝廷に抵抗した蝦夷（えみし）の子孫」という小原町長は「波風大いに立てるべし」が座右の銘。「沖繩の知事の異議申し立てもそう。地方から、勇気ある最初の一石を投げるのが大切です」と語っていた。

減反は今も形を変えて残っている。この町長の先見の明を活かしていたならば、「令和のコメ騒動」などなかったのでは、とつくづく思う。

究極の選択

なんということだ。今度の参院選では、生まれて初めて自民党に票を入れるかも知れない。そう夕食時に話すと、カミさんが「あら、私もそうなのよ」と笑った。

なにも年を取って保守化、右傾化したわけではない（笑）。私も、カミさんも（ひよつとしたら彼女の方が）学生時代から筋金入りの左翼である。

とにかく、石破政権には今しばらく頑張っただけいいのだ。

地元出身の総理だから、というわけではない。「負けて、極右の高市やコバホークがわがもの顔で出てくると思うと、ぞっとする」とカミさん。同感である。

政権交代もして欲しくない。国民民主が「年収の壁」で伸びてから、どの野党もポピュリズムむきだし、減税のバーゲンセールを競うありさまで、もう支離滅裂である。

国民が望んでいるのは、目先の減税や給付金でひと息つくことではない。子や孫たちに迷惑をかけない、長期的な成長戦略や財政再建の道すじ、この国の在り方を徹底的に議論してほしいだけなのだ。

石破はもともと減反に疑問を持ち、選択的夫婦別姓には肯定的、防災省の創設が念願で、不平等な日米安保や地位協定を変えたいと願い、何より「アベ政治」が大嫌いだった。党内の抵抗を押し切り、これらを公約にすれば、あら不思議、劣勢が大勝に転じるところのだが、思うことが口に出せない鳥取人の性格なんだろうなあ(笑)。

せめて私ら夫婦が票を投じるしかない。

モサツデクを忘れてないか

とても不満である。

イランとイスラエルについて、テレビ解説はこうだ。「親

米、親イスラエルだったパーレビ国王が、1979年のイラン革命で倒され、対立が深まった」。これだけ。イランという国王だの聖職者だの、専制と宗教の国みたいに見えるがちだが、実は違う。「パーレビ以前」、イランには民主的選挙で選ばれたモサツデクという首相がいた。

モサツデクは民主化を進め、欧米が独占していた石油生産の国有化に取り組んだ。国民は熱狂的に支持したが、米 CIA の工作によるクーデターで失脚、独裁世襲制のパーレビ王朝がよみがえった。米国言いなりのパーレビの下で汚職と腐敗は広がり、のちのイラン革命につながる。

これを知らなければ、イランの根深い米国不信は理解できない。二十世紀初頭、トルコと同じくイランでも近代化を目指す立憲運動が起きた。刺激したのはアジアでいち早く近代化して大國ロシアを破った日本で、だから、今も両国は親日的だ。日本は中近東で仲裁役の好位置にいる。

ところが、イランを空爆したイスラエルを「軍事的手段は遺憾、到底許容できない」と非難してオツと思わせた石破総理も、米国が空爆すると「核兵器阻止の決意の表れだ」と途端に迎合。ああ、何という情けないダブルスタンダード。これでは永久に仲裁役にはなれない。

People Everyday

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

五月から「NPO法人本の学校」の理事になった。前職の時からお世話になっていて、自分で本屋を始めて一年経ったタイミングで、声をかけていただいた。

まだ時期尚早な気もしないではなかったが、少しでも恩返しができればと思い、引き受けることにした。

そして早速、NPO本の学校宛に招待が届いたとのこと、児童書版元の説明会に参加するため、六月十二・十三日と上京した。

ベストセラーとなった翻訳絵本が刊行十年を迎え、新作に合わせて著者も来日。編集者や翻訳者も交えてのトークで、海外での絵本見本市での出会いから作品ができていくプロセス、絵本の見どころ、翻訳の苦労など、普通では聞けない話は大変興味深かった。

絵本は好きなので、店頭でも揃えたいという思いはあるが、売場が成立するだけの在庫量が置けないので、商売人

としての冷静さを優先している。

*

ちょうどその日の夜に、蟹ブックスで行われたイベントに参加。「困ってる人文編集者の会」が作っているZINE『おてあげ』の五号刊行記念で、書店バイヤー・飯田さんの連載を書籍化するための公開企画会議だった。

書籍バイヤーは、売れている本やこれから売れそうな本を仕入れたり、各店舗に仕入れ冊数を振り分けたりするとても重要な仕事だが、店舗のスタッフからは「足りない!」「こんなに売れない!」と常に文句を言われて、あまり報われない。それを面白く(ときにも悲しく)語れる飯田さんは、SNSで見かける通りキャラの立った方だった。イベントでは、筑摩書房の柴山さん、KADOKAWAの麻田さん、柏書房の竹田さんと、名うての編集者が企画書を作成しプレゼン。同じ連載でもコンセプトや章立てから印税の計算まで、編集者の視点が違えばここまで変わるのか!と驚きの連続だった。

イベント終了後の懇親会にも参加し、みなさんにご挨拶する。(余談だが竹田さんは関西在住とのこと、店でイベントできるかも)

*

翌十三日は主に書店巡り。

午前中は五月に来店していただいた、鎌倉のポルベニールブックストアさんへ。二十坪弱での新刊書店。

来店された時に「ウチの店と品揃えが似ている」とおっしゃっていたが、個人的には定有堂っぽさを感じた。

仕入先から仕器の作り方、イベントのやり方など色々とお話を伺うことができた。

*

午後からは、独立系書店界限では、いま最も注目されている機械書房さんへ。

たまたまゴミを捨てに外に出てきていた店主の岸波さんに、店まで案内してもらおう。エレベーターのない古いビル

の三階にある、五坪で正方形の一室。

店のロゴが入ったトートバッグを持っていたので本屋であることがすぐバレる。早速自己紹介して、色々とおしゃべりしていたら一時間経っていた。

独立系書店の品揃えの傾向が、人文書中心からエッセイが加わり、最近では（短歌は当然として）詩や文学にシフトしつつある。

その中心が機械書房さんで、実際に店頭に並んでいるものも、文芸誌で新人賞を取った作家のZINEや注目されている詩人の詩集やアンソロジー、二十代の書き手による小島信夫の批評など、初めて目にするものばかりだった。

ちなみに『随風』は百冊以上売ったそうだ。

ウチの店でも小説や詩を書いているお客様もいるし、若い方がエンタメ・純文学問わず昭和の作家を均一棚から抜いていく光景をよく目にする。

誰もがもっと気楽に読んで書けばいい。読んで書くことがもっと日常に溶け込めばいい。そして読む・書く・売る、の境界がもっと曖昧になればいい。

【参考文献】

『仕事文脈 26 特集：みんなで生き残る』タバブックス

ポルベニールで購入。とても切実な特集内容だった。

『汀心 2』汀心出版

『詩あ 1』パブリックレイン

機械書房で購入。アンソロジーと詩誌。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (28)

村瀬 謙介

(小取舎)

にんげん研究会に所属している鳥取大学の学生七名から四月二八日にインタビュ―を受けた。にんげん研究会とは、文化や芸術に関心のある鳥取大学地域学部生と、うかぶLCCが共同で企画した、「にんげん」をテーマに研究する集まり。インタビュ―はどれも大体、小取舎設立の経緯を聞かれるのだが、これがなかなか簡単に説明できない。一つの事象が一直線に向かった結果ではないからだ。なのでいつも、高校を卒業して大阪の映画の専門学校へ行って、というところから説明をするため話が長くなる。この度のインタビュ―時間も私の余談も多く、一時間半を越え、学生たちに迷惑をかけたかもしれない。「(村瀬さんは色々なことをやっているが物事の)初めって大変じゃないのか」という質問や、「どうしたらやる前に諦めずに済むか」という質問があった。ああ、そうかこれは小取舎へのインタビュ―ではなく村瀬謙介という人間を知るための研究なの

ね。私自身も答えながら、「(ああ、自分の行動はそういうことだったんだ)」と気づく場面も多かった。学生に村瀬謙介の本質を形作られていった感じがする。すまない、おじさん上手く答えられているかわからないよ、などと少々凹みつつ終了した。

そして六月二三日、その成果発表が松崎の「たみ」で行われ行ってきた。村瀬謙介という「にんげん」を研究されたのは初めてかもしれない。自分以外の人たちが自分のことを発表する、そしてそれを本人が見るといふ少し不思議な機会を逃すのは勿体無い。

インタビュ―対象者は私だけではなく、他にも書店オーナーやプロダクトデザイナー、映画館オーナーなどが対象者で、他のチームはまとめをパワーポイントや印刷物を元に口頭で発表されていたのだが、村瀬インタビュ―チームはまさかのインタビュ―時の動画が流れ始めた。「おいおい恥ずかしいよ……」と最初は思ったが、実はそのインタビュ―動画を元にかつこよく編集した映像作品になっていた。そもそも長尺のインタビュ―を一五分の映像に上手にまとめただけでも凄い。映像だけではなく、要点を本をあしらった印刷物や、インタビュ―中の私の言葉をランダムに記した葉が成果物になって観客に配られていたりして、そこまでしてくれた学生の作品にちよつと泣きそうになっ

た。あとで話を聞くと、私の話に感化されて、普通の発表ではなく、チラシデザイン、文章、映像撮影・編集、イラストなど、メンバー各々のやりたいことを詰め込んだ成果物にしたいということであつたらしい。嬉しすぎる。自分でも把握しきれていない村瀬謙介の行動学が周りに影響を与えたのは面白い結果だった。

さて、二〇二五年も後半に突入。諸々が終わつていき、諸々が始まつていく。

そういえば、かなり前に友人のKさんに教えてもらったよく当たるといふ占いサイトを思い出し見てみた。

二〇二五年上半期のあなたは、「旅先でいきなり、ダイコンやニンジン収穫の仕方を教わる」とか「急に、踊りを習つてみたくなる」など、これまでのあなたの「生き方」には全然関係のない、まったくの新規の物語が始まつていきそうなのです。

だと。バイクのことじゃないか。一年前は一年後に自分がバイクに乗っているなんて想像もしていなかった。今では徐々に公道での運転にも慣れ、移動自体が面白くなつてきている。車種はモンキーの125ccで小ぶりなのだが、以前バイク乗りだった汽水空港の森さんもそれを見て、「うわーいいっすねえ！俺も欲しくなる！」と大興奮されていた。これからいろんなところに行きたい。

話を戻し、その占いには「今は二〇二五年の中でも特にのぼらなければいけないかった登り坂をのぼり終える時で、過去数年間にも渡つても、これまでやってきた、人生の大規模な再整理やりリニューアル工事が終わる時期でもある」と書いてある。だが、まったく山頂という感じはしない。この先もずっと八合目から九合目あたりを登っている気さえる。小取舎としての「次のお楽しみ計画」はすでに始まつている。不安とワクワクは人間の醍醐味であるとしひしと感じている。

・小取舎の最新刊

『鳥取あれこれ』

内田克彦 著

本体 一〇〇〇円

発行 2025.5



内坪井町日記（14）

齊藤 仁昭

（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

五月二十四日

またも東京。もう破産だ。意識下の破滅への欲望をうっすら感じているが、蓋をしている。家族のことを放置できない。大人になったものだ。なったのか？喫煙は緩やかな自殺といったのはゲンスブール？セルジュの音源は、年取ってくるとなとても素晴らしい。

スタジオで練習後、佐藤君いつもの居酒屋へ。菜の花の辛子和え、カブのスライス、揚げナスのポン酢かけ。こういうのがいいよね。どれもうまい。野菜の摂取は居酒屋がいちばんだ。佐藤君と遊び始めて三十三年。いつもほんとうにありがとう。

五月二十五日

小岩 BUSHBASH につライプ。またもブッシュバッシュ。

こちらもういつもほんとうにありがとうございます。「けやき」と題された企画で、共演は「退屈」と「ミヤ&タク」。主催の退屈の復活ライブということで、こちらも気合を入れて臨んだ。叩きのめす気概で演奏した。

ミヤ&タクは、律儀にオルタナをやっているのに、ふたりの演奏とボーカルがキュートすぎて、美しききえあつた。退屈のミキさんのベースはいつにも増して頼もしく、バンドをぐっと力強く支えていた。ほか三人の酔っぱらいもちろん最高。打ち上げ会場は「けやき」という居酒屋で、名前の由来はそこから。初めていったが名店だった！私は熊本に戻らねばならず。一時間で離脱。名残惜しすぎる。

六月四日～七日

旭川で開催された全国菓子大博覧会に出張。初日と最終日はほとんど移動日で、実働は中日の五日のみ。気温が下がった日でも低く、十二度と天気アプリに出ていた。熊本から来た我々には堪える。五日はくまモンが登場するステージイベントのアテンドが主な業務。くまモンは非常に機敏で、集客力も抜群、ステージさばきも見事。社会人としての自分の凡庸さが身に染みる。

ステージ後は仲間と共に熊本のお菓子のサンプルを約千個配布。とにかく寒くて手がかじかむ。スーツの上に羽織るものも持ってきておらず、震えながらの業務だった。

ひと段落し、昼食は皆で旭川ラーメン「天金」へ。醤油ラーメンが染み渡る。馴染む。

夜は札幌へ移動するメンバーが多い中、私は旭川に残り、数名と焼き肉を食べたのち、スナックへ。カラオケを遠慮しつつ、落ち着いた店内の匂いと時間の流れに安らぐ。こういうスナックが好きなのだ。カラオケは、聞いているのも苦手。ない方がいいと思うている。

翌朝はゆっくり目に起きた。起きてからは、翌週に鶴屋にて開催される和菓子祭りの打ち合わせなど。やたらと広い旭川駅のベンチにてコーヒーを飲みながら、次の展示に向けた資料整理や電話など。空気は冷たいが、出張ならではの孤独な時間は嫌いではない。

帰り道、旭川空港発の便が遅れ、羽田に到着したのは乗り継ぎの熊本便の搭乗時間ギリギリ。係の方に誘導されて走る羽目に。重い荷物と疲労で息も絶え絶え。機内にて、知人にばったり会い、その姿を見られていて恥ずかしい。空港には妻と子が迎えに来てくれていた。ひといきつい

だが、なんと翌日は東京にてライブ。東京にステイすりやいいもんだが、ホテルも高いし、切符も出張とライブと別で取ってたし、妻も少々ご立腹だったこともあり、一度熊本に戻ったのだった。

六月八日

東京にてマルタと星霜とのツーマン。マルタさんは体調を崩し、直前に退院されたばかり。お客さんの空気は温かく、迎え入れるようだったが、我々はあえて叱咤激励スタイルで、ロックナンバー多めで先攻。

マルタさんのステージは、歌も曲も歌詞も、バンドの演奏も、すべてに呼吸があり、生き物のようだった。声には包み込むような力強さがあつた。音が立ち上がるたびに、聴いている側の体温が変わっていくようだった。

会場の吉祥寺曼荼羅2では初めての演奏だったが、歴史の堆積を感じる素晴らしい会場だった。

論語について(2)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、巧言令色、鮮矣仁。(学而篇第一・第三章)

子曰「い」はく、巧言令色、鮮「すく」なきかな仁。

孔子の教えで最も重要なものは「仁」である。が、この語は孔子以前から存在した。『論語』には「述べて作らず」(述而篇)という言葉も見えるが、そのことは「温故知新」(為政篇)という知のあり方とも結びついており、「仁」の場合も例外ではない。「仁」は孔子による造語ではなく、孔子によってリニューアルされた語だと言えるのである。

例えば、孔子以前の文献とされる『詩経』には、鄭の国の人々が鄭の荘公の弟の共叔段を讃えた詩として、「叔の洵「まこと」に美にして且つ仁なるに如「し」かざるなり」(鄭風・叔于田)の句が見える。これについて孔穎達の『毛詩正義』は、「「仁」は是「こ」れ行なふの美名、「叔

は乃「すなは」ち乱を作「な」すの賊。之「これ」を「信「まこと」に美好にして又た仁なり」と謂「い」ふは、国人悦ぶの辞を言ひ、実「まこと」の仁には非「あら」ざるなり」と説いている。「仁」は叔(共叔段)の行為を褒めた語で、乱賊である彼を「実に美しくて更に仁だ」と言うのは、人々が喜んだ讃辞を言い、真の「仁」ではない、というのである。が、それは後世の「仁」の意味に基づく解釈であり、ここに説く人を喜ばせる行為こそ、この句の「仁」の意味であり、本来の「仁」の意味ではなかったか。

思うに、この句の「仁」の意味は「佞」の語に似ている。「佞」には、相手にこびへつらうマイナスの意味もあるが、才覚で相手の心を喜ばせるプラスの意味がある。古く自己の謙称を「不佞」と言ったのもそれ故だろう。讃辞である右の句の「仁」の意味は、この意味に似ていると思われるのである。唐の徐鍇の『説文解字繫伝』に、「佞は、女に従ふ、仁の声」とあり、「佞」は「仁」と同音とされる。そもそも「佞」は「仁」と「女」とが合わさった形であり、この二つの字は形・音・義ともに近かった可能性がある。本章を論じるにあたって、なぜ「佞」と「仁」との関係に注目するのかと言えば、そこにリニューアルされた「仁」の意味が自ずと表現されていると思うからである。本章に「佞」の語は無いが、本章に見える「巧言令色」こそ、「佞

の意味を表わす語句に他ならない。このことについては、『書経』に「何ぞ巧言令色にして孔〔はなは〕だ壬なるを畏れん」（皐陶謨）の句があり、これについて清の江聲が「巧言」は、其の言語を好くす。「令色」は、其の顔色を善くす。「孔壬」は、甚だ佞なり」（『尚書集注音疏』）と注釈し、「壬」を「佞」と解くことから明らかである。なお、右の「巧言令色」の説明は、『論語集解』に見える本章の古注の引用で、句全体の意味は、「どうして言葉や容色で人を喜ばせる甚だ佞なる者を恐れようか」となる。

思うに、本章において「巧言令色」の語句が用いられた理由は、「仁」と「佞」との明確な対比にある。『書経』（偽古文を除く）は孔子以前の文献とされ、「巧言令色」は「佞」を意味する語句として古くから認知されていたと思われる。「巧言令色」が甚だ「佞」であることを前提に、本章は「巧言令色」が「仁」であることは少ないと対比的に語っているのだが、翻って考えてみると、「仁」と「佞」が対比される理由は、先に論じたように、むしろ「仁」と「佞」とが形・音・義ともに近い語だったからではないか。思うに、リニユーアルされた「仁」の意味は、「佞」との違いを強調することで成り立つのであり、「巧言令色」に「仁」は少ないという本章の発言には、「佞」と「仁」とを対比的に区別しようとする意図が感じられるのである。

実際、『論語』では「佞」は「仁」と明確に区別される。「或るひと曰〔い〕はく、雍や仁にして佞ならずと。子曰〔い〕はく、焉〔いづく〕んぞ佞を用いん。人に禦〔あた〕るに口を以て給すれば、屢〔しばしば〕人に憎まる。其の仁なるを知らず、焉〔いづく〕んぞ佞を用いん」（公治長篇）という章を見れば、それは明白である。孔子の弟子の雍（冉雍）を或る人が「仁」であつても「佞」ではないと評したのに対し、孔子は人に応対するのに口舌の巧みさをもつて当たれば、しばしば人に憎まれることになるから、どうして「佞」であることに尽力しようかと反論している。が、或る人はむしろ「仁」であるならば「佞」でもあるという当時の通念にのつとつて発言したのではなかったか。本章が文末を「仁鮮矣（仁鮮〔すく〕なきかな）」とはせず、「鮮矣仁（鮮〔すく〕なきかな仁）」という倒置の強調表現をとつたのも、当時の通念から予想される反論を踏まえてのことだろう。「巧言令色」、即ち「佞」には「仁」が少ないという発言は、リニユーアルされた「仁」の意味を、当時の通念を踏まえて、逆説的に語っているのである。

抽象に逃げない

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

バルガス・リョサが亡くなった。八十九歳。この連載の始まりから、リョサの唱える(た)ドグマ、「作品の文学性はテーマよりも、テーマを処理する技法にある」にもたれて「書くこと」について書き続けてきたので、喪失感が大きい。

先号で『サンショウウオの四十九日』のことを書くつもりが、あとから読んだ吉田知子の方が面白く、とぼしてしまったのだが、さほど余韻が残った作品でもなく、何を書くこうとしたんだっけ、と考え、リョサの死の直後だったこともあり、この作品の「テーマ」は何だろう、と考えたことを思い出した。何だか、ただのキワモノ小説と評されぬよう、立派に見せよう、と腐心しているような気がした。小説を書いていると、作品を「立派」に見せたい、という虚栄から逃れ難いのだが、これをやられると、読む側は、興奮めして物語に没頭しにくくなる。最近、自分の小説を書くとき、あまり難しい字は使わない、とか、いくつか気を

つけていることがあるが、「抽象に逃げない」というのもその一つで、「立派に見せる」を良くない、と思つてしまふのは、それと通ずるところがあるせいかもしれない。このことは程度の差こそあれ、その次に読んだ鈴木結生『ゲーテはすべてを言った』でも感じた。筆者は師と仰ぐ作家、として丸谷才一と大江健三郎を挙げており、この作品は読まねばな、と思つたのは、僕自身もこの二人の作家から強い影響を受けているから。丸谷の文章のリズムを体感するために、『樹影譚』を筆写した、とあればなおさらで、これは戦後文学で最良の短編だと思ふ、と常々相手構わず吹聴してきた作品でもあって、この人は、いわば兄弟弟子ではないか、などと親近感を篤くしていたのだが、似ているところはそこまで、この作者は二十三歳。戦後文学、などと書いたが、僕にとっては(ほぼ)同時代のこれらの作家も、鈴木は極めて異なる文学史的視点で読んだんだろうなあ、僕にとつての夏目、とまではいわないまでも、小島信夫、安岡章太郎、といったあたりか。

大江、丸谷を尊敬するが、両者とも自己の作品を立派に見せたがる作家ではある。大江の『同時代ゲーム』は周縁論、丸谷の『女ざかり』が贈与論、『輝く日の宮』は御霊信仰を「調性」とする作品で、術学的というか、両者とも学者が手すさびで小説を書いている風ですらある。文化人

類学、民俗学、文学史といった人生を賭するに値する「実業」を担保しておいて、こんなお茶目な一面もあるんです、と小説も書く、みたいな。と、そういう人たちに薫陶を受けて書き始めた若い作家が、「立派に見せる」ことを習得してしまっている、これは仕方がない。『ゲーテ』の作中、人類の神話を生み出す力と、その現代的意義について書かれた『親和力』という書物の刊行記念パネル・ディスカッションの様子など、『輝く日の宮』の、「日本の幽霊シンポジウム」におけるパネル・ディスカッションの雰囲気をよく写しているが、これはもうオマージュの域を超えた。パステイ・シユとでも呼ぶべき代物であろうか。鈴木はこの作品で第172回芥川賞を受賞しているが、さぞ丸谷に読んで欲しかっただろうなあ。僕も選に漏れた賞の選評を五人の作家・評論家が書いてくれたが、名は聞き覚えがあっても作風など知らぬ人ばかりで、これが丸谷才一、大江健三郎、筒井康隆らが読み、その上での感想を聞かせてもらえていたら、もう賞などどうでもいい、思い残すことはない、と思ったに相違ない。第171回芥川賞受賞作『サンショウウオの四十九日』の主人公はシャム双生児の瞬と杏という姉妹。瞬を「わたし」、杏は「私」と表記したのは面白い。結合双生児は、二つの頭部が一つの体を共有したり、一卵性双生児がどこか体の一部でつながっていたり、

と、いくつか異なる発現の仕方をするようだが、瞬と杏は一つの体をちょうど真ん中で隔てたような結合の仕方をしている。四六版、百四十頁と短い作品だが、中盤以降、結合双生児にとって、意識の独立に関する考察を、心理学や哲学を引き合いに出して「抽象に逃げる」仕方では合わせようと感じた。何と帳尻を合わせているかというところ、結合双生児というキワモノの「テーマ」、結合双生児は題材ではあり得ても、テーマじゃない、というやさしさと、である。瞬側の喉から腫れ始めるのだが、高熱は共有しなければならぬ扁桃炎。異性とキスしてみたい片方が、片割れを拝み倒して遂げる願ひ。夢は誰のもの？とといった生面からの描写だけでも十分面白く、悪びれず、これがテーマなのです、と開き直ればいいのに。意識や人格に対する葛藤を書きたければ、日常の言葉で呟かせればいい。

大江からは質量の大きい言葉を、小説的技巧や語り口は丸谷から学んだ。丸谷は今でもその作品を繰り返し読む、数少ない作家の一人だが、もう大江を読むことはない。あれほど心酔した「質量の大きい言葉」は、「抽象への逃げやすさ」を孕んでいたからかもしれない。

紫陽花と青楓

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

「お散歩」プロジェクト第二弾、今回のミッションは「紫陽花」である。

と言うのも、たまたま、野暮用を終え草臥れ果てて夜道を帰るさ、とある庭先で、白く浮かび上がる、何とも摩訶不思議な花を見たからなのである。一見、何の花か分りかねたが、葉っぱや全体の風体から見れば、どうやら紫陽花。「変わり紫陽花」とでも言うのか、「変化紫陽花」とでも呼ぶのか、滅法変わった形状をしていた。

花卉（ではないのだが）が尖っていて、放射状に開き、その上、八重咲きであるという（勲章の形を御想像いただきたい）、最早、紫陽花であることを放棄しているかのような姿であったのだ。

そういう眼で眺めると、行く先々で見る紫陽花が一様でないことに気が付いた。

色も、白、水色、青、桃色ときて、紫まではよいとして、天気予報の「予想最高気温」図の三十五度以上を示すあの禍々しい濃い紫（というよりも、どす黒とも呼びたい）のような色合いは、存在感があり過ぎて、梅雨時の花としては聊か暑苦しい。

従来の花（ではない）ひとつの大きさの中に小さな花が蜷集して、それがさらに大きな花を形成しているという、小手毬ならぬ大手毬、はじけたカリフラワーのような有様のものであれば、今日も今日とて、見かけた種類は、個々の花（くどいようだが、花ではない）が喇叭状をなしていて、それが大きくまとまると、さながら花全体が、ドレープ状に波打っているように見える。誠に千変万化、変幻自在。

「窓を放ち襖を排ける夕、紫陽花の花の花片一枚つゝ、雲に星に映る折よ。」（「五月より」）と謳った鏡花も、「青葉の影くらく霽する木下闇に濡れ色かゞやかしい紫陽花を見るのもまたこの節のたのしみ」（「梅雨」）と書いた清方（紫陽花廼舎と屋号するくらい紫陽花が好きだった）も、かくの如き（化け物）紫陽花は想像だになかったことだろう。

木々の緑もまた、生き生きとした季節であるのだが、どの木もどの樹も、日の光と水をたんと得て、繁りに繁り、青さも青し、圧迫感が半端でない。春の日、あれだけ目を楽しませてくれた桜の樹も、緑濃く鬱蒼として、その下を歩くだけで息苦しい。まわりの空気から、酸素が奪われているような心地さえする。

と、ふと見た家の玄関先に、一本だけ楓の木があった。晩秋の冴え渡った空気の中で燃え立つような紅は艶やかで華やかで、人の心を騒がせるものがあるが、今は当然ながら青葉である。青楓とも若楓とも言い、俳句の季語にもなり、日本画の画題にも多い。抱一の「青楓朱楓図屏風」や大観の「緑雨」のような有名作品から、鯉や鮎をあしらった有象無象の軸物色紙まで、とりどりにある。

その青楓が、雨に濡れそぼって、楚々として美しく、かつまた、同じ青葉でありながら、暑苦しさは微塵もなく、むしろ清々しい。

思うに、葉の密度が疎らである所へ、風が通り抜ける様が想像され、蒸し暑い季節に、一服の清涼感を呼び起こすからであろう。

清方は、「緑の雨」の中で「隣家の庭には、今若楓の茂り盛りで、枝一ぱいに擴がった新葉が、いくつもの緑の羽扇を擴げたように重なって、雨を帯び、風にゆられては、はらはらと露を振ふ。」と、その様を賞翫している。

雨降りは、どうにも散歩には向かないのだが（根性が足りない）と誹られるかもしれないが、こどもはどうやらそうではないらしく。

去年出た、岩井真木の絵本（絵は五十嵐大介）『あめのかえりみち』（福音館書店）は、大人には鬱陶しく煩わしいだけ雨道を、普段とは違う様子に大喜びで、あつちを覗き、こつちに寄り道と、新たな発見をしながら嬉しそうに帰って行く。排水溝を流れる水も、そこかしこにできる水たまりも、木から落ちる雫も、坂道を流れ落ちる水の滝も、こどもにとっては遊びの材料なのですね。兄弟の表情が、実に生き生きとしていて、気持ちがいい。

鳥取、やっぱり。

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

この七月で鳥取を離れることにした。二〇二〇年四月から、六回目の春と夏を迎えた。

次に向かうのは、(東京を経由して) イギリスである。Intercultural Communicationの修士課程に進学する

もしも、体が二個あるなら、片方を鳥取に置いて、片方をロンドンに送るかもしれない。が、そうやって全てを追うことはできない。もちろん、オンラインで修士課程をやるという方法もあっただろう。一方で、勉学を理由にして、日本ではない国に暮らすことは、自分が取りたい選択肢であり続けた。

イギリスの修士課程は一年間を基本とする。あつという間だ。一年という年を新たな場所で過ごすということ想像する時、鳥取一年目のことを思い出す。周りの場所や人になれるのに数ヶ月。仕事に慣れるのに半年。だんだんと知り合いが増え出すのに一年。今、お世話になってる人たちの多くが、実は三、四年目以降にあった人たちだったりする。

一年間。ロンドンにいても、慌ただしく過ごしている

うちに終わってしまいそうな期間だ。それに引き換え、鳥取での五年間と四ヶ月は私にいろいろな縁をもたらしてくれた。ここで暮らし続けることもできると思える。

それでも、広い世界を見たい、もう一度自分が外国人になりたい。その気持ちは消えることはなかった。

グローバルエリートが多くが世界を股にかけて似たような距離を移動するらしい。一方で、家族の事情、身体的な理由、経済的な理由などで、移動が制限されている人も多くいる。このような移動における格差を「移動格差」として解説する『移動と階級』という本を読んだ。「移動すること、より多くの人脈を得て、収入も上がっていく」というある意味での宗教に、私は入信している側なのかもしれない。そんな夢を信じ切ることができたのは、私が恵まれているからだ。

留学して修士課程に進学すると本格的に考え出したのは、三年前の二〇二二年。次のステップとして、教育についてきちんと学んだというバックグラウンドを求めていた。というのも、社会人になって、通信制の大学で教員免許を取り直した私には、きちんとした教育に関する学問を修めていないという後ろめたさがあったのだ。それは私の強みでもある一方で、たまたま免許取得中に繋がった人たちが

東京学芸大の学生だったものだから、四年ないしは六年かけて、教育を学ぼうとする彼らが眩しく見えたのだ。

なにより、専門性のなき、学問としての寄る辺のなきは、「国際教養学部」なるものを卒業した時からつきまとい続けた悩みだった。私は四年もかけて何を学んだのだろうという思い。母語である日本語で大学教育をしていたら、たどり着いていたであろう深みに行けていないのではないかという不安。一応、ジェンダーをテーマに卒論を書くために、ゼミに入ったものの、ジュディス・バトラーの主張をスラスラ喋るようにならず、ボーヴォワールを読み込んだわけでもない。そんな私だったが、宝塚歌劇で卒論を書くことだけは固く決意していたので、その卒論が学部の優秀論文になったときには、嬉しい気持ちと、これで評価されていいのだろうかという気持ちが混じっていた。

留学に向けて準備する中で、それと似たようなことが起き続けた。出願した大学からはいずれも合格をいただいた。英語と国語を連携させて、言語教育の未来を考えるとというニッチで壮大なテーマにお墨付きをもらえたのは意外だった。

そして、給付型の奨学金を獲得することは難しいと言われている中、幸運にも奨学金を得ることができた。今回の留学にあたって、イギリス政府が支援するチーヴニング奨

学金を獲得した。給付型奨学金の中でも、学費から生活費までほとんどを負担してくれる奨学金である。日本国内でも二、三人しか選ばれないもので、社会起業家の方、Folds Ser. 30 に選ばれるような人など華々しい経歴の人たちが多い。そんななかで、しがたない教員にすぎない私、専門性もまだ曖昧な私がそんな奨学金を得るなど、どこかで「なぜ自分が」と今でも思ってしまう。

そんな中でも「なぜ自分が」の迷いの中に取りべき道はあるように思う。他者の思いを引き受けていく中に自分の道はあるのかもしれない。それは、この『音信不通』の文章を「いい文章ですね」と褒められながら書き続けた鳥取での日々で身につけた生き方でもある。

一方で、留学を考え始めて病気になったとき、「なぜ自分が」と思った。いろいろな将来を諦める覚悟をした。それでも、留学することは諦めなかった。学びたい気持ちを止めるものはなかったから。

そうやって、自分にあたえられたものを、思う存分味わい尽くす道を選んでいくことにした。

八月一日（金）十九時半『とつとり、ひとり、ふりかえり』開催@SHEPSHEEP BOOKS

梅の実

あきの素生

(くうねるめがね)



針子が孵化した瞬間を見た。厳密には、孵化した直後と
思われる瞬間を、たまたま目にしたので。水鉢の底床を這
う水草のあたりから、まるでロケット花火みたいなスピー
ドで斜め上に向かって飛び出し、一気に水面の、水鉢のふ
ちのあたりに到達した。「最初はぼーっと浮かんでいるこ
との多い針子」なぞと思っていたが、生まれた瞬間からか
なり機敏だった。小さな卵の中に、体を小さく小さく丸め
ているから、そこから解き放たれるときのエネルギーはす
さまじいものなのかもしれない。数ミリ、数センチの世界
のお話。

出勤途中に梅の木がある。花が終わって久しい。あると
き、通勤路に緑色のころころしたものが落ちていることに
気が付いた。視線を上げて、ああ、梅の実か、と合点がいつ

た。春先の凍てつく朝に、ひとときの癒しをくれた梅が、
ここへ来て実を結んでいた。道端に落ちている実は濃い色
をした小ぶりなもので、収穫にはまだまだ早い、未熟な実
であることが見て取れた。その大きさから、小梅ではなく
梅酒などに使われる通常の大きさの梅の木なのだとわかっ
た。

子どもの頃、カリカリ小梅が好きだった。お茶うけ用の
一、二粒が個包装されているものも記憶にあるが、私の大
好物だったからか、わが家には、一袋に何十個と入ったお
漬物のカリカリ小梅が常備されていた。いわゆる「鍵っ子」
だったため、両親不在の際にカリカリ小梅を心ゆくまで食
べた。種の中にある通称「天神様」も大好きだった。梅干
しの欠点として、種で足がつくことが挙げられると思う。
噛み砕かれた種の残骸からその所業が親にばれ、カリカリ
小梅は一日三粒までというルールが課された。種を隠べい
するという知恵がなかったことが、現在の健康をもたらし
てくれている。当時は、三粒なんてすぐじゃん、と不満を
感じつつ、三粒ルールを律儀に守り、こつこつ一日三粒の
カリカリ小梅を食べ続けた。知恵はないが、まじめであっ
た。そのうち、カリカリ小梅を食べてばかりはいられなく
なって、いつのまにか、カリカリ小梅は常識的な頻度で食

べる、お気に入りのお漬物のひとつとなった。

漬物に限らず、「梅味」は好きだ。すっぱいとしよっぱいのハイブリッド。お茶漬けのものと梅味一択、梅味の板ガムや仁丹をよく食べた。このところ夏になると常備している塩分補給用のタブレットに梅味が出ているのを見つけたときは、一も二もなくそれを選んだ。小梅という名の飴は、特に口に入れた瞬間の味が好みだった。夏になると、梅恋しくなる。

そんなわけで、実家の庭の桜の木が台風で折れてしまったとき、迷わず梅の木を植えることを提案した。もちろん、小梅のなる種類の。木を植えた翌年に、すぐたくさんの花を咲かせて実をつけたのかどうか、残念ながらも覚えていない。なり年、不なり年を幾度か繰り返して、今では、腰のあたりの高さだった木が少し見上げるほどに大きくなった。家を離れてからも、毎年梅の具合を確認する。花はどのくらい咲いているか。実はなかったか。夏と年末、帰省した際に見よう見まねで剪定をする。剪定の出来を試されているようで、その年の実のなりに少しばかり責任を感じたりもする。

採れた実を母が家で漬けてくれたことがあった。その自

家製カリカリ小梅は、梅にまつわる記憶や気持ちをまとい、格別の味わいであった。一日三粒以上は食べなかったけれども。

通勤途中の梅の木は、目につくところにひとつだけ実を残していた。少しずつ大きくなる様子を見上げるのが日課になった。うつそうと茂る梅の葉の中でまんまるい梅の実は、虚空に浮かぶ惑星のようで、その浮遊感が不思議と宇宙を感じさせた。

もういつでも収穫してもらっていいですよ、といわんばかりの立派な梅の実に成長したが、先日強い雨が降った後、地面に落ちていた。やわらかく黄色く熟し、近くで見ると思っていたより大きかった。梅干にも梅酒の梅にもならなかったが、おいしい記憶をいくつも呼び覚ましてくれたのだった。

案内



ドラマメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館



・定有堂教室と太極拳の詳細は
下記の、QRコード参照



定有堂教室案内サイト (@ドラマメリア)

『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル (ボルゾイレコード) ・食堂カルマ

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階) ・エスキース (倉吉)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記:

東京に行ってきました。実に七年ぶりの上野の森 国際子ども図書館。しかし感慨にふける間もないぐらい暑かったです。焦げそうでした。

ドラマメリア (編集長)

鳥取県の図書館大会で三砂慶明さんと奈良敏行が対談。分科会「大人も本を読んでいないといわれるけれど……」8月18日(月) 米子コンベンションホール。オンライン参加も可能。7月27日(日) 白井明大さんの『ヘリヤ記』刊行記念イベント。奈良インタビュー。伊民公恵さん詩の朗読。会場は「森の生活者」。

三砂慶明さんインタビュー記事が『文化通信7月1日号』に掲載。一面と七面。「必要な人に必要な、一冊を届ける」という見出しです。

奈良敏行 (発行人)

